

令和 2 年 5 月 7 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K10243

研究課題名（和文）うつ病休職者に対する職場トラウマ記憶書き直しに関する認知療法技法の導入と効果検証

研究課題名（英文）Introduction and investigation on the efficacy of imagery rescripting for traumatic memories in workplaces among employees on sick leaves due to depressive disorders

研究代表者

高梨 利恵子（Takanashi, Rieko）

千葉大学・子どものこころの発達教育研究センター・特任研究員

研究者番号：30755848

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、うつ病をはじめとした精神疾患により休職している従業員が持つ、職場でのストレスフルな出来事の記憶（以下、職場トラウマ記憶とする）が精神症状に及ぼす影響を明らかにし、職場トラウマ記憶に対するイメージ書き直し技法の効果を検証することであった。この結果、多くの事例で意に反して思い出される職場トラウマ記憶があり、また記憶に関連する否定的な信念があることが分かった。リワークプログラム参加により、記憶に関連する精神症状は改善する傾向にあるが、症状が残存するケースもあった。職場トラウマ記憶書き直しの手続きにより、記憶に関連する苦痛や、コントロールの難しさ、ネガティブな信念の確信度が減少した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神疾患による休職者の増加や、復職後の再休職率の高さは大きな社会的問題であり、これらの事例に対する専門プログラムであるリワークプログラムが開発され高い効果を上げる一方で、リワークプログラム中に症状が再燃し中断したり、プログラム終了後に再発、再休職となる事例が報告され、このような難治事例のメカニズムの解明とその治療が求められる。本研究では、うつ病等で休職している従業員の多くは生命の危機にかかわらずとも、つらくストレスフルな出来事を経験し、その出来事の記憶が現在の精神症状に大きく影響している可能性を示した。またこの精神症状を改善する方法としてイメージ書き直しが有効となることを示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the characteristics of the negative memory about the aversive events at work among employees on sick leaves due to mental disorders, and the effectiveness of imagery rescripting for those memories. Our study revealed that most of those employees had intrusive negative memories about aversive events and negative beliefs linked to those memories. Participating Re-work programs improved symptoms related to those memories, but there were patients who remained symptomatic. Imagery rescripting arranged as a group format and focused on those aversive memories decreased the distress of those memories, the sense of uncontrollability over those memories and confidence ratings on those negative belief linked to those memories.

研究分野：臨床心理学

キーワード：イメージ書き直し技法 うつ病 休職者 認知行動療法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 精神疾患による休職と再休職率の高さの問題に対応するリワークプログラム

うつ病等の精神疾患で休職に至るケースの増加や復職後の再休職率の高さが報告されており、社会的な問題となっている。近年医療の現場では、特にうつ病などの精神疾患に罹患し休職している従業員に対するリハビリテーションプログラム（以下、リワークプログラム）が実施され、その高い効果が示されている（大木ら，2012）。リワークプログラムは基礎体力の向上、症状理解や自己洞察、コミュニケーション能力の向上などを目指し、集団プログラム、個別プログラムなどが盛り込まれている。しかし、リワークプログラムをドロップアウトする事例もあり、プログラムを終了して職場復帰を果たしても、復職後1年間の間に再休職、失職、自殺に至った例についても報告されており（五十嵐ら，2016）、さらに効果の高い新たな技法の開発と導入が望まれる。

(2) うつ病の難治化とストレスフルなライフイベント

うつ病の発症には、ストレスフルなライフイベントが関与することが広く報告されているが、近年の難治性のうつ病患者と寛解患者を比較した研究では、うつ病の引き金になったライフイベントに対する精神的苦痛が、難治性のうつ病患者は寛解中のうつ病患者に比べて有意に強かったことが報告されている（Kimura et al., 2015）。

したがって、リワークプログラム参加者の中で、治療が奏功しない難治例の中には、休職に至る経緯で生じた職場でのストレスフルな出来事に対する精神的苦痛が強いケースがあることが考えられ、この点に焦点を当てた介入の必要性が考えられる。

(3) 記憶のイメージ書き直しの概要

心的外傷後ストレス障害のトラウマに焦点をあてた認知行動療法の技法を参考にして、近年、社交不安症やうつ病などの他の精神疾患に対しても、発症に関係するストレスフルでトラウマティックなライフイベントに関する記憶をイメージ上で書き直す認知行動療法の技法が開発され、効果をあげている。言語的な介入のみでは効果が見られなかったケースに対しても、ライフイベントの記憶に関するイメージを使用することで、強い感情を伴うネガティブな認知の再構成がなされると考えられている。うつ病に対するイメージの書き直しを行った探索的な研究では、慢性的な経過をもつうつ病患者の症状が改善し、その効果が1年後のフォローアップでも保たれていたことを報告している（Brewin et al., 2009）。

以上を踏まえ、研究代表者らのリワークプログラムでは、疾患の発症や休職に寄与したと参加者自身がとらえている職場で生じた出来事に焦点を当て、その出来事に対する認知再構成を実施したうえで、アクションメソッドを用いる集団精神療法であるサイコドラマを利用して出来事のイメージの書き直しをするプログラム（職場のつらい記憶に対するイメージ書き直し）を実施した。概要をTable 1に示す。事前準備を除く所要時間は約90分である。スタッフの構成はリーダー1名、サブリーダー3名である。参加者の人数は自らの職場のつらい記憶の書き直しを行う1名を含む15名程度であった。

Table 1. 職場のつらい記憶に対するイメージ書き直しの概要

ステージ	概要	所要時間
ウォームアップ	身体を使用したシンプルなエクササイズを行う	約5分
ステージ1	ライフイベントが生じた当時の自分になりきって演じる	約20分
ステージ2	他の参加者が当時の自分役となりライフイベントを演じているのを客観的にみる	約10分
休憩		約5分
ステージ3	小グループで別のとらえ方を検討する	約20分
ステージ4	新たなとらえ方をしてライフイベントを再演する	約10分
シェアリング	ステージ1～4で自分が体験したことをシェアし、その後各自振り返りシートを記載する	約20分

2. 研究の目的

本研究では、現在の精神症状に影響を及ぼしている職場におけるライフイベントの記憶を「職場トラウマ記憶」と定義したうえで、その性質を明らかにすることを目的とする。さらに、職場トラウマ記憶に関連した精神症状が、リワークデイケアに参加することによりどの程度改善するかを検証する。その上で、職場トラウマ記憶に焦点を当てた治療技法であるイメージ書き直し技法を実施し、その効果を検証する。

3. 研究の方法

(1) 侵襲的に体験される職場トラウマ記憶の性質

対象 関東圏にある精神科単科クリニックのリワークデイケアに通う患者 87 名のうち、研究の参加に同意をした 78 名 (90%。内訳は男性 62 名、平均年齢 39.5 ± 10.69)。うつ病等の精神疾患に罹患し、休職中である。

調査内容 研究代表者らが作成した質問紙である「日常生活を困難にする記憶について特徴を調べよう」を用いた。この質問紙は、以下の項目が含まれていた。1. 心的外傷後ストレス障害の症状の一つである、侵襲的(思い出したくないのに頭に浮かんでくる)に体験される職場でのストレスフルな出来事の記憶(以下侵入記憶)の有無とその個数、2. 出来事が生じた時期、3. 侵入記憶の内容、4. 苦痛の程度(0-100)、5. 出来事がまるで今起きているかのように感じる程度(Nowness; 0-100)、6. 鮮やかさ(0-100)、7. 侵入記憶の内容は自分についてどのような意味があるか(記憶は自分がどのような人間であるということを表しているか)、8. 生活障害度(0-100)、9. 記憶はどのような感覚情報(モダリティ)を持っているか(視覚的な情報、聴覚的な情報、動悸、冷や汗などの体の感覚)、10. 一週間での出現頻度、であった。

(2) リワークプログラム参加による職場トラウマ記憶に関連した精神症状の改善の検討

リワークプログラムの職場トラウマ記憶に関連した精神症状に対する効果を検証した。対象群を置かないシングルアームデザインで行った。

対象 (1) のリワークデイケアを完遂したもの 70 名(内訳は男性 53 名、平均年齢 39.2 歳; ± 10.32)。

方法 出来事インパクト尺度(IES-R, Weiss et al., 1997)を、研究代表者らが職場で生じた出来事に焦点を当てるように改変し、「職場トラウマ版 IES-R」とした。この質問紙では、対象とする出来事を「休職に至る経緯で生じた職場のストレスの中から現在の精神状態に最も強い影響を与えていると考えられるもの」とした。この職場トラウマ版 IES-R を、リワークデイケア参加開始時と終了時に実施して得点の比較を行った。

(3) 職場トラウマ記憶に対するイメージ書き直しの効果検証

対象 (1) で分析した対象の内、とくに職場トラウマ記憶の精神症状への影響への対処が課題であるとデイケアスタッフと参加者本人で判断された 5 名。

内容と評価 職場トラウマ記憶に対するイメージ書き直しの前後で以下の評価において比較を行った。

その出来事に対する苦痛の程度、コントロールの難しさ、鮮やかさ、生活障害度(0; まったくない-100; 非常にある)

その出来事から導き出された仕事についてのネガティブな信念に対する確信度(0-100%)

4. 研究成果

(1) 侵襲的に体験される職場トラウマ記憶の性質

職場で起きたストレスフルな出来事の中で、思い出したくないのに、浮かんでくる記憶(侵入記憶)について尋ねた質問紙(日常生活を困難にする記憶について特徴を調べよう)への回答を解析した。

侵入記憶を抱える参加者の割合と記憶の個数

解析の結果、78 名中 72 名(92%)の参加者に侵入記憶が見られ、そのような記憶の個数の平均は 2.78 ± 2.29 個であった。

侵入記憶のもととなる出来事が生じた時期

職場のストレスフルな出来事に関する侵襲的な記憶があると答えた参加者に、その出来事が生じた時期について尋ねた結果、63 名から回答があった。内訳は、1 年前未満 9 名(14%)、1 年前以上 2 年前未満 30 名(48%)、2 年前以上 3 年前未満 12 名(19%)、3 年前以上 4 年前未満 5 名(8%)、4 年前以上 5 年前未満 1 名(2%)、5 年以上 6 年前未満が 3 名(5%)、6 年以上前が 3 名(5%)で、最長が 10 年前であった。平均して 24.22 ± 21.55 か月前の出来事についての記憶であることがわかった。

侵入記憶の内容

職場のストレスフルな出来事に関する侵襲的な記憶があると答えた 72 名の侵入記憶を、その内容が類似しているものを集めてカテゴリー化した。その結果「仕事に対するネガティブな評価」にカテゴリー化される記憶を報告した方は 17 名(24%)、「(人格等)仕事以外の問題に対するネガティブな評価」は 14 名(19%)、「職業上の人間関係における(上司、同僚など)葛藤」が 9 名(13%)、「業務が複雑・困難であった」が 7 名(10%)、「同僚の死」が 5 名(7%)、「業務過多」が 4 名(6%)、「仕事上の失敗」が 2 名(3%)、「その他」が 14 名(19%)であった(Figure 1)。

侵入記憶の性質(苦痛、今その出来事が起こっているかのように感じる程度; NOWNESS、鮮やかさ、生活困難度)

侵入記憶の様々な性質について(まったくない 0 - 非常にある 100)で評価するよう求めた。その結果、苦痛については 57.29 ± 32.15 、NOWNESS は 39.58 ± 31.01 、鮮やかさは 61.67 ± 28.4 、生活困難度は 42.04 ± 30.29 であった。

侵入記憶に結び付いている自分に対する信念

侵入記憶は自分についてどのような意味を持っているか、自分はどのような人間であるということを示しているか尋ねたところ、侵入記憶があると答えた72名のうち67名(93%)が記憶は自分についてのなんらかの信念と結びついていると答えた。この侵入記憶に結び付いている自分についての信念を類似性に従って分類した。その結果、「無能・無力である」に分類された方は21名(31%)、「自弱い・ダメージを受けている」は10名(15%)、「嫌われている・否定されている・他者をイライラさせる」が10名(15%)、「軽んじられている」が3名(4%)、「仕事に向いていない」が2名(3%)、「価値・意味がない」が2名(3%)、「その他」が19名(28%)であった(Figure 2)。

侵入記憶の感覚的な特徴(モダリティ)

侵入記憶はどのような感覚的な情報(モダリティ; 思考、感情、視覚的な情報、聴覚的な情報、体の感覚)を持っているかについて、複数回答を可能として尋ねた。その結果、「視覚(記憶の中に見えるものがある)」と答えた参加者が31名(43%)、「聴覚(記憶の中に聞こえるものがある)」が16名(22%)、「身体感覚(記憶の中に、動悸、冷や汗、震え、頭痛などの身体感覚がある)」が31(43%)名であった。

一週間での出現頻度

侵入記憶が先週1週間のうち、何度出現したかについて尋ねたところ、0回と答えた参加者が20名(28%)、1回~2回が27名(38%)、3回~5回が15名(21%)、6回~10回が5名(7%)、それ以上が2名(3%)、その他「数えきれない」、「多く」、欠損値がそれぞれ1名(1%)づつあった。

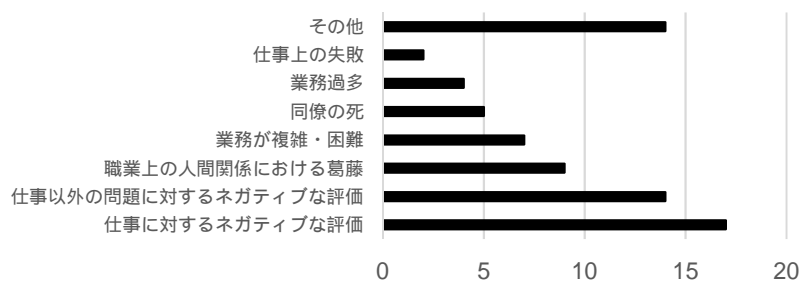


Figure 1. 侵入的に体験される職場トラウマ記憶の内容

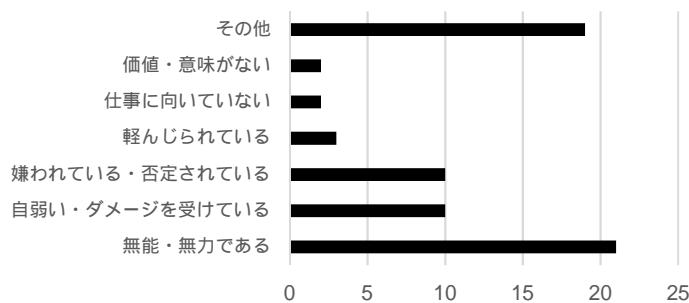


Figure 2. 侵入的に体験される職場トラウマ記憶に結び付いている自分に対する信念の内容

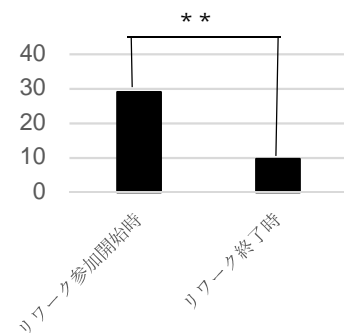


Figure 3 リワーク参加開始時とリワーク終了時の職場版 IES-R の比較

(2) リワークデイケア参加による職場トラウマ記憶に関連した精神症状の改善の検討

リワーク参加開始時と終了時の職場トラウマ版 IES-R 得点に関して繰り返しのある t 検定を実施した。この結果、リワーク参加前の平均値 29.1 ± 15.02 であったが、リワーク参加終了時には平均値 9.69 ± 12.38 に有意に下がっていた ($t=10.67, p<0.01$; Figure 3)。また、リワーク参加前の職場トラウマ版 IES-R 得点が、心的外傷後ストレス障害のスクリーニングの際に用いられるカットオフ値 24 点を上回る参加者は 41 名 (58.57%) であった。一方リワーク終了時には 7 名 (10%) と減少を見たが、終了時にもカットオフ値を上回っている参加者がいることがわかった。

(3) 職場トラウマ記憶に対するイメージ書き直しの効果検証

参加者は職場トラウマに対するイメージ書き直しの前後で、その出来事の記憶に対する苦痛の程度、コントロールの難しさ、鮮やかさ、生活障害度を、0(まったくない)から 100(非常にある)で評定した。また記憶に関連するネガティブな仕事についての信念の確信度(%)も併せて評定した。これらの評定について、Wilcoxon の符号付順位検定を用いてイメージ書き直し前と、イメージ書き直し後の評定を比較した。この結果リワーク参加開始時に比べ、苦痛の程度 ($Z = -2.03, p = .042$)、記憶のコントロールの難しさ ($Z = -2.03, p = .042$) および信念の確信度 ($Z = -2.02, p = .043$) が有意に改善していた (Figure 4)。一方鮮やかさについては有意な改善が

見られなかった ($Z = .82, p = .41$)。

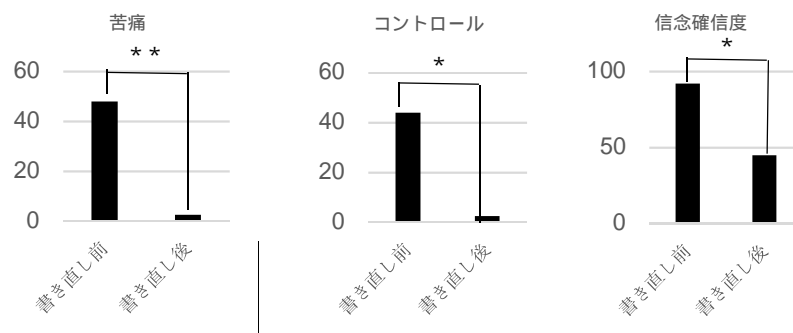


Figure 4. 職場トラウマ記憶に対するイメージ書き直しの効果

謝辞 本研究を実施するにあたり、爽風会心の風クリニック理事長の佐々木一先生、およびリワークデイケアのスタッフの荒木章太郎精神保健福祉士、高橋保子看護師、仙頭彩奈臨床心理士、伊野ゆり子保健師に多大なご協力を頂きました。深く感謝の意を申し上げます。

○主な引用文献

大木洋子, 五十嵐良雄 2012 リワークプログラム 利用者の復職後の就労継続性に関する効果研究. 産業精神保健 20(4):335-345.

五十嵐良雄, 大木洋子, 林俊秀 2016 「リワークプログラム利用者の復職後1年間の就労継続性に関する大規模調査」 研究代表者 秋山剛 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 精神障害者の就労移行を促進するための研究分担研究報告書 研究分担者 山内慶太 リワークプログラムの費用と効果に関する医療経済学的研究 ~気分障害による長期休職者の復職後の労働生産性に関する調査~ 79-87

Kimura, T. Hashimoto, T. Niitsu, M. Iyo 2015 Presence of psychological distress symptoms associated with onset-related life events in patients with treatment-refractory depression J Affect Disord. Apr 1;175:303-9. doi: 10.1016/j.jad.2015.01.027. Epub 2015 Jan 22.

Brewin CR, Wheatley J, Patel T, Fearon P, Hackmann A, Wells A, Fisher P, Myers S. 2009 Imagery rescripting as a brief stand-alone treatment for depressed patients with intrusive memories. Behav Res Ther. 2009 Jul;47(7):569-76. doi: 10.1016/j.brat.2009.03.008. Epub Mar 27.

Weiss, D.S., Marmar, C.R. 1997. The impact of Event Scale-Revised. In: Wilson, J.P., Keane, T.M. (Eds.), Assessing Psychological Trauma and PTSD: A Handbook for Practitioners. Practitioners. Guilford Press, New York, pp. 399-411.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Takanashi R*, Yoshinaga N, Oshiro K, Matsuki S, Tanaka M, Ibuki H, Ohshima F, Urao Y, Matuzawa D, Shimizu E.	4. 巻 48(2)
2. 論文標題 Patients' perspectives on imagery rescripting for aversive memories in social anxiety disorder.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Behavioural and Cognitive Psychotherapy	6. 最初と最後の頁 229-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1017/S1352465819000493	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 荒井 穂菜美 高梨 利恵子 大川 翔 関 陽一 高橋 純平 久能 勝 清水 栄司	4. 巻 96(5)
2. 論文標題 不安症の分類と診断	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床と研究	6. 最初と最後の頁 534-538
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Matsumoto K, Sutoh C, Asano K, Seki Y, Urao Y, Yokoo M, Takanashi R, Yoshida T2, Tanaka M, Noguchi R, Nagata S, Oshiro K, Numata N, Hirose M, Yoshimura K, Nagai K, Sato Y, Kishimoto T, Nakagawa A, Shimizu E.	4. 巻 20(12)
2. 論文標題 Internet-Based Cognitive Behavioral Therapy With Real-Time Therapist Support via Videoconference for Patients With Obsessive-Compulsive Disorder, Panic Disorder, and Social Anxiety Disorder: Pilot Single-Arm Trial.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of medical Internet research.	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2196/12091.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yoshinaga N, Kubota K, Yoshimura K, Takanashi R, Ishida Y, Iyo M, Fukuda T, Shimizu E.	4. 巻 -
2. 論文標題 Long-term effectiveness of cognitive therapy for refractory social anxiety disorder: one-year follow-up of randomised controlled trial.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychotherapy and Psychosomatics.	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamada Fuminori, Hiramatsu Yoichi, Murata Tomokazu, Seki Yoichi, Yokoo Mizue, Noguchi Reni, Shibuya Takayuki, Tanaka Mari, Takanashi Rieko, Shimizu Eiji	4. 巻 -
2. 論文標題 Exploratory study of imagery rescripting without focusing on early traumatic memories for major depressive disorder	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/papt.12164	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshinaga N*, Matsuki S, Niitsu T, Sato Y, Tanaka M, Ibuki H, Takanashi R, Ohshiro K, Ohshima F, Asano K, Kobori O, Yoshimura K, Hirano Y, Sawaguchi K, Koshizaka M, Hanaoka H, Nakagawa A, Nakazato M, Iyo M, Shimizu E.	4. 巻 85
2. 論文標題 Cognitive Behavioral Therapy for Patients with Social Anxiety Disorder who Remain Symptomatic following Antidepressant Treatment: A Randomized, Assessor-Blinded, Controlled Trial.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Psychotherapy and Psychosomatics	6. 最初と最後の頁 208-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1159/000444221	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件(うち招待講演 0件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Takanashi R, Sento A, Araki S, Takanashi Y, Ino U, Sasaki H & Shimizu E
2. 発表標題 Work-related intrusive memories and linked beliefs in Japanese employees on sick leaves with depressive disorders.
3. 学会等名 9th World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies Berlin, Germany (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沓澤夏奈 田口佳代子 沼田法子 吉田齋子 岡本洋子 高梨利恵子 関陽一 田中麻里 清水栄司
2. 発表標題 慢性疼痛に対する 個人認知行動療法のケースシリーズ
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会(中京大学名古屋キャンパス)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takanashi R, Yoshinaga N, Shimizu E.
2. 発表標題 A Qualitative Study of Patients' Experiences on Imagery Rescripting for Early Traumatic Memories in Social Anxiety Disorder
3. 学会等名 48th annual congress of European Association for Behavioural and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高梨 利恵子、荒木 章太郎、高橋 保子、仙頭 彩奈、伊野 ゆり子、田中 麻莉、佐々木 一、清水 栄司
2. 発表標題 職場トラウマ記憶へのイメージ書き直しが有効であった一事例
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松木 悟志、中村 浩子、永田 忍、高梨 利恵子
2. 発表標題 生活上のリスクを許容していく過程が奏功した思春期強迫性障害の一例
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永田忍、高梨利恵子、松木悟志、清水栄司
2. 発表標題 TV電話による遠隔認知行動療法を実施したパニック症の一事例
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本一記、清水栄司、中川彰子、須藤千尋、吉田斎子、関陽一、沼田法子、高梨利恵子、横尾瑞恵
2. 発表標題 強迫症・社交不安症・パニック症の患者への在宅WEB会議による遠隔認知行動療法の シングルアーム試験
3. 学会等名 第22回日本遠隔医療学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田斎子、松本一記、濱谷沙世、須藤千尋、浅野憲一、関陽一、横尾瑞恵、高梨利恵子、大城恵子、田中麻里、野口玲美、廣瀬素久、永田忍、沼田法子
2. 発表標題 テレビ会議システムによる強迫、社交不安、パニックの 遠隔認知行動療法の治療反応性と治療同盟の関連
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Rieko Takanashi, Ayana Sento, Shotaro Araki, Yasuko Takahashi, Yuriko Ino, Hajime Sasaki, Eiji Shimizu 2
2. 発表標題 Psychological symptoms and effectiveness of cognitive behavioral interventions associated with work-related stressful events in employees on sick leaves with mood disorders in Japan.
3. 学会等名 47th Annual Congress of the European Association for Behavioural and Cognitive Therapies. (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高梨 利恵子、荒木 章太郎、高橋 保子、仙頭 彩奈、伊野 ゆり子、田中麻莉、佐々木 一、清水栄司
2. 発表標題 休職に至る要因の質的検討
3. 学会等名 第1回日本うつ病リワーク協会年次研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takanashi R, Yoshinaga N, Shimizu E.
2. 発表標題 The effectiveness and patients' experience of imagery rescripting for early traumatic memory in a full cognitive behavioral therapy program for social anxiety disorder.
3. 学会等名 46th Annual Congress of the European Association for Behavioural and Cognitive Therapies. (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高梨 利恵子、土門 由紀、山田 繭子、馬場 洋子、荒木 章太郎、高橋 保子、仙頭 彩奈、綾 千晶、満山 宏人、伊野 ゆり子、佐々木 一、山内 直人
2. 発表標題 インタビュー情報を利用したドロップアウトリスクの見立てについて
3. 学会等名 第10回うつ病リワーク研究会年次研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松木悟志、中村浩子、永田忍、高梨利恵子
2. 発表標題 過剰な責任感を強化し続ける強迫性障害の1例
3. 学会等名 第16回日本認知療法学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	清水 栄司 (Shimizu Eiji) (00292699)	千葉大学・大学院医学研究院・教授 (12501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐々木 一 (Sasaki Hajime)	心の風クリニック・理事長、医師	
研究協力者	荒木 章太郎 (Shotaro Araki)	心の風クリニック・主任、精神保健福祉士	
研究協力者	高橋 保子 (Takahashi Yasuko)	心の風クリニック・看護師	
研究協力者	仙頭 彩奈 (Sento Ayana)	心の風クリニック・臨床心理士	
研究協力者	伊野 ゆり子 (Ino Yuriko)	心の風クリニック・保健師	